

多摩区

多摩区のなりたち

多摩区は市域の北西部、多摩川沿いの地域です。東は高津区、南は宮前区、西は麻生区に隣接し、北は多摩川をへだてて東京都です。北側に多摩川がつくった沖積低地（ちゅうせきていち）があり、南側は多摩丘陵の丘になっています。その丘と低地の境近くを二沢川と二ヶ領用水が流れています。

この地域には、奈良時代はじめ頃からの生田根岸古墳群、飯室山の横穴古墳群や平安初期の仏教遺跡として寺尾台の廃寺跡などの遺跡があります。鎌倉時代の稻毛庄（いなげのしょう）の名残りが、胥生郷や小沢郷にうかがわれます。

戦国時代には、小田原北条氏の役帳（やくちょう）に、登戸・宿河原は多摩川の北と書かれており、この当時多摩川はもっと南を流れていたようです。天正18年の多摩川大氾濫によってその流路は大きく変わり、ほぼ現在の流路になりました。

江戸時代には、橘樹（たちばな）郡に属して塙・宿河原・登戸・菅・上菅生・五反田の六村があり、多摩郡に属して中野島村と和泉・石田の飛び地がありました。ほとんどが天領（幕府直轄領）で、一部に將軍家の菩提寺である増上寺領がありました。

明治時代になると、村々は次々に統合され、明治8年に上菅生村と五反田村が合併して、生田村が誕生しました。また、この年、中野島村が多摩郡から橘樹郡に移管されました。

明治22年の市制町村制施行により、多摩川沿いの塙・宿河原・登戸・中野島・菅の5村が統合して稻田村が誕生しました。丘陵部の生田村では、西側の細山・金程・高石を併合して大きな村となりました。

昭和2年に南武鉄道や小田急小田原線が開通し、京浜工業地帯や都心に向かうことが容易になりました。昭和7年に稻田村は稻田町となり、昭和13年に稻田町と生田村が川崎市に編入され、その大字（おおあざ）となりました。同時に古代から続いてきた橘樹郡の名はなくなりました。

昭和41年に生田の丘陵地に西三田団地ができ、開発のシンボルとなりました。昭和47年には、川崎市は政令指定都市となって区制がしきれ、多摩区が誕生しました。昭和57年には多摩区から麻生区が分区し、かつては生田村に入っていた高石・細山・金程の3地区が麻生区に編入されました。

のぼるところ

登戸(NOBORITO)

○場所

多摩区の中央部北寄りの地域です。北は多摩川に面し、東は宿河原、西は中野島、南側は生田・桙形などに隣接しています。

地域のほぼ中央を小田急小田原線が通り、南端を二ヶ領用水が西から東へ流れています。生田や桙形との境界になっています。

○由来

登戸の「ノボル」・「ノボリ」は、低いところから高いところへ上がるという意味です。また、「ト」というのは所を意味します。従って「ノボリト」は「のぼるところ」ということで、「古い街道が、多摩丘陵の登りにかかるところ」だと思われます。

エピソード

戦国時代の記録には、登戸は「多摩川の北」とかかれています。多摩川はもっと南を流れていたようで、今の二ヶ領用水のあたりを通っていたものと思われます。

津久井道が、多摩川を渡る所が「登戸の渡し」です。渡しを上ると石屋河岸で今のが踏み切りのあたりです。道は中店(なかだな)で鍵の手に曲がります。このあたりが登戸の中心地でした。

旅籠(はたご)・居酒屋・煮売り屋など旅人相手の店が並び、また、職人の町としても知られ、下駄屋・左官・染物屋などが集まっていました。



奥多摩の木材は、多摩川を筏流し(いかだながし)でくだし、羽田で大きな筏に組み直されて、江戸の木場(きば)へ送られました。

「筏会所」(いかだかいしょ)が置かれて筏の点検が行われ、筏師の泊まる宿もあったそうです。

鍛(こて)絵がすばらしい登戸稲荷神社

ショクの意味は？

宿河原（SYUKUGAWARA）

○場所

多摩区の低地にあり、北は多摩川をはさんで東京都狛江市です。南は二ヶ領用水を境にして長尾、東は堀、西は登戸に接しています。

江戸時代の宿河原村の地域が、そのまま現在の宿河原 1~7 丁目になっています。

○由来

明治 22 年から昭和 7 年までは稻田村宿川原といっていました。

地名の文字から考えると「宿場のあった河原」ということですが、宿場があったという歴史的事実はありません。

鎌倉時代に書かれた『徒然草』(つれづれぐさ)115 段に、宿河原のぼろぼろの話が出てきます。「ぼろぼろ」というのは当時の念佛僧で、河原などに集団で住み、歌念佛・踊念佛を行いながら暮らす半僧半俗の人々をいいます。

中世にはこのような人たちが住んでいたようで、この人たちを「夙（しゆく）の者」といいました。「しゆくがわら」は「夙の人たちの住む河原」からきていると考えられます。

エピソード

宿河原も戦国時代までは登戸と同じく多摩川の北側の地だったことが記録に記されています。それが多摩川の大氾濫で流れが変わり、多摩川の南岸の地に移ったようです。



宿河原堤の桜並木 下は二ヶ領用水

荒れ果てた土地を開発しようとして、隣の駒井（狛江市）の人たちが移住してきました。その人たちによって現在の宿河原がつくられたと思われます。

宿河原には、船島（ふねしま）・橋本・北村・本村・宿ノ島・下綱（さげつな）の六つの集落がありました。現在も地域の行事が、組（講中ともいう）の単位で行われています。

○場所

多摩区の北東部に位置します。北は宿河原、西は東生田、南は宮前区五所塚・神木本町、東は高津区下作延に接しています。江戸時代の長尾村の河内長尾（かわちながお）の地域で、現在の長尾1～7丁目にあたります。

1・4・5丁目は、多摩川の沖積低地（ちゅうせきていち）で、2・3・6・7丁目は、多摩丘陵末端部の丘の上に位置しています。

○由来

地名の由来は、定かではありませんが、「長い尾根に沿った村」という考えがあります。多摩川方面から眺めると、東西に長く連なった丘に沿って存在しています。丘や山の背のことを「尾根」と言い、「長い尾根」が地名になったのでしょうか。

エピソード

長尾3丁目の丘の上に妙楽寺があります。「あじさい寺」として有名で、初夏には大勢の人が訪れるお寺です。

平安末期にはすでに存在していた古いお寺で、鎌倉幕府の記録に「威光寺」として出てきます。源頼朝の弟の全成が院主となるなど、幕府とつながりの深い大寺でした。

昭和53年に薬師三尊を修理した時、日光菩薩の体内から「長尾寺」の銘が発見されました。この結果、鎌倉時代の威光寺が長尾寺であることが確認されました。



東高根森林公园

妙楽寺の南西の丘の上に長尾神社があります。長尾の鎮守で、古くは「五所権現」（ごしょごんげん）といいました。1月に行われる「射的祭」（マトーサイ或いはヤブサメ）は、外からくる悪魔を退散させて無病息災を祈る行事として、土地の人々により永く伝えられています。



○場所

北は多摩川に面し、東は登戸、南は生田、西は青に隣接します。

二ヶ領用水の取り入れ口があり、その支流の砂川が、登戸との境界となっています。



二ヶ領用水の取り入れ口

○由来

昔、この地域は多摩川の流れが南北を通り、川の中の島のような形になっていました。これは度重なる多摩川の洪水によるものです。

この川の中の島が、「の」を漢字表記して「中野島」と表わされたものです。「シマ」は、川の中の自然堤防（川が運んだ上砂で作られた微高地のこと）などところで、周囲より高くなっている地形の呼び名です。

エピソード

戦国時代の終わり頃まで、多摩川はもっと南側を流れていたようです。16世紀末の大洪水で流れが北に移り、この地域は、旧水路と新水路にはさまれる形の川中島(かわなかじま)になってしまったようです。

江戸時代はじめ、万(満)蔵院というお坊さんが、ここを開発して住み着いたため、万(満)蔵島ともよばれたそうです。その後、多磨郡(たまぐん)の金子村から開拓民が入り、この地の開発を行ったそうです。

江戸時代には、多磨郡に属していましたが、明治8年に橋樹郡に移管され、明治22年の稻田村の誕生により稻田村大字中野島になりました。

特産物としては、豊かな多摩川の伏流水を使った紙漉き(かみすき)が挙げられます。これは「和唐紙」(わとうし)と呼ばれ、「唐紙屋」という家を中心繁盛し、江戸に店を持つほどだったと言われます。

○場所

多摩区の北西の端（はし）に位置します。北は多摩川に面し、西は稲城市矢野口です。東は中野島、南は生田・細山に接します。

江戸時代の菅村にあたるところで、現在は、菅・菅稻田堤・菅野戸呂・菅仙谷・菅城下・菅番場・菅北浦・寺尾台に分けられています。

○由来

地名の由来は、文字通り「菅(すげ)の自生の目立つところ」ということでしょう。

菅は水菅・山菅の総称で、カヤツリグサ科に属する草です。種類はとても多く、200種におよぶといいます。昔の人は、これで蓑（みの）や笠をつくり、また、菅葺（すがだたみ）を作りました。

このように、人間生活に役立つ植物が多い場所では、植物が地名になりやすく、菅の地名もそういう由来だろうと思われます。

エピソード

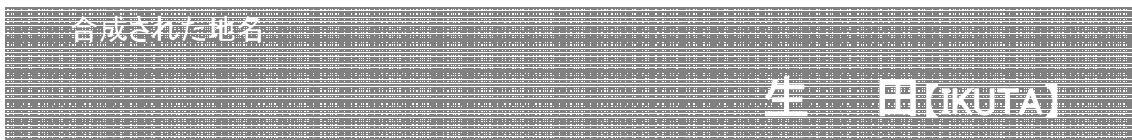
住居表示により、現在の町名ができました。この町名の中には、古い地名を大事にして守って行こうという考えにそって付けられた町名もあります。菅もその中の一つで、菅村の地であることをはっきりさせるため、菅の字を上に、下に旧字名(あざめい)を入れた町名が付けられています。

菅仙谷(すげせんごく)の寿福寺(じゅふくじ)は、鎌倉時代からの古寺で境内は広く、景色もすぐれていたので、その様子は「江戸名所図会」(えどめいしょづえ)にものせられています。また、この「江戸名所図会」の中で、寺宝の大般若経(だいはんにやきよう)には、源義経や武蔵坊弁慶の署名があると紹介されています。



「江戸名所図会」寿福寺全景

菅北浦にある薬師堂も古く、毎年9月に行われる「菅の獅子舞」は、市内三ヶ所に残る獅子舞の中で最も形の整ったものとして有名です。県の無形民俗文化財に指定されています。



○場所

多摩区の小田急線に沿って、生田駅の東側から読売ランド前駅の西側までの地域です。二ヶ領用水の南に広がる丘陵地帯にあたります。

現在は、生田・東生田・耕形・東三田・三田・栗谷・西生田・南生田・長沢の九つの町があります。

○由来

江戸時代には、上吉生村と五反田村という二つの村があった所で、明治 8 年に二つの村が合併しました。その時、新しい村の名として採用されたのが、上吉生の「生」と、五反田の「田」を合成した生田村でした。

明治 22 年には、西側の高石・細山・金程の 3 村を編入して、もともと大きい面積を持つ村でしたが、更に広くなりました。昭和 13 年に、川崎市に編入された以後も、川崎市の大字として残っていました。

エピソード

昭和 2 年に開通した小田急小田原線は、一村一駅の原則を立て、多摩川を渡った稻田村には「稻田登戸」、生田村には「生田」、柿生村には「柿生」、鶴川村には「鶴川」という具合に駅の設置を行いました。



生田支所前のいしづみ碑

駅の設置場所は、多くが村の中心地でした。生田村でも、地元の人々は役場や学校のある村の中心地を希望しました。しかし小田急は、当時日本一の農機具会社の「細王舎」(さいおうしゃ)があった高石に近い場所に駅を置こうとしました。両者の話し合いの結果、役場に近い所に「東生田」駅、細王舎に近い所に「西生田」駅と、生田村には二駅設置することになりました。これが今の「生田」駅、「読売ランド前」駅です。

城郭の地名

枠形(MASUGATA)

○場所

旧生田村の一部で、東生田と生田の間に位置しています。小田急小田原線が、登戸の低地から多摩丘陵に入る際の入口にあたり、また、府中県道沿いの低地から丘陵部にかけての地域です。

○由来

生田緑地の西側に枠形山があります。この山が町名の由来になっています。

「マスガタ」というのは、枠のような四角い形をいいます。この地に中世の城跡があり、城があった当時は、城門に作られた石垣で囲まれた四角の警備出入口が「マスガタ」で、目立つということから「マスガタ」と呼ばれたと考えられます。

また、もう一つは、この山城の頂上が四角く削られていて、それが目立ったということではないかということです。

たしかに山頂は四角の形状になっていますが、後世に手が入っている可能性もあり一概にはいえません。

エピソード

砦（とりで＝山上の城）のあった頂上から、西へ尾根を下ると麓（ふもと）近くに広福寺があります。枠形城の館（やかた）があった所といわれています。稻毛三郎重成の供養塔も置かれています。

戦国時代には、地元の豪族、横山弘成が入城し、小田原北条氏の家人(けにん)として武田信玄の軍とここで激しく戦ったと伝えられ、弘成の墓もここにあります。

このように、枠形城は、天然の要害をなした山城として、戦国時代まで利用されてきました。

広福寺の収蔵庫には、地蔵菩薩立像(じぞうばさつりゅうぞう)と聖観音菩薩立像(しよくかんのんぼさつりゅうぞう)が収められています。前者は平安時代、後者は鎌倉時代のすぐれた作品で、共に県指定重要文化財となっています。



枠形城址

細長い谷間の地

長沢 (NAGASAWA)

○場所

多摩区の南の端（はし）の地域です。南は宮前区胥生に、西は麻生区東百合丘に、北は三田・南生田に接しています。昔の五反田村の南部で、明治以降は、生田村の集落名で、生田村の中ではかなりの広い地域を占めます。

昭和57年に住居表示が行われ、長沢1～4丁目と南生田1～6丁目の町名が生まれました。長沢1～3丁目が東長沢、長沢4丁目と南生田2～5丁目が西長沢にあたります。

○由来

平瀬川の源流地帯に位置しており、北側には五反田川との分水嶺(ぶんすいれい)になる丘が東西に連なり、南側は矢上川との分水嶺になる胥生ヶ丘の高い丘陵が並びます。

その間の谷間を平瀬川の源流が東西に流れています。この東西に細長い谷間を「長沢」と言ったのでしょう。

エピソード

かつての長い谷間の景観は、すっかり変わっていますが、小田急小田原線沿線の地区よりも古いものを残しています。



諏訪神社

長沢の鎮守は、諏訪神社です。ここは昔の農村の面影を残して賑やかで、祭りばやしの連中が威勢良く笛・太鼓の音をきかせます。

このお宮の参道はまっすぐで長く、鉄砲馬場(てっぽうばば=鉄砲のようになってしまった馬場)と呼ばれ、明治時代までは祭りの時に農耕馬の駆け比べがあったと言われます。